

「比較史的アプローチによる近代アイルランド」プロジェクト研究会報告要旨集：初期綿業としての18世紀ランカシャー・リネン業

TAKEDA, Izumi / 竹田, 泉

(出版者 / Publisher)

Institute of Comparative Economic Studies, Hosei University / 法政大学比較経済研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

比較経済研究所ワーキングペーパー / 比較経済研究所ワーキングペーパー

(巻 / Volume)

125

(開始ページ / Start Page)

26

(終了ページ / End Page)

27

(発行年 / Year)

2005-04-20

比較史的アプローチによる近代アイルランド シリーズ No. 2

「比較史的アプローチによる近代アイルランド」プロジェクト
研究会報告要旨集

後藤 浩子（編）

「比較史的アプローチによる近代アイルランド」 プロジェクトの活動概要

1. プロジェクトのねらいと成果

本プロジェクトは、アイルランド史をイギリス、アメリカそしてヨーロッパとの同時代的関係において捉えなおしてみようという企図のもとに集った日本のアイルランド史研究者によって遂行された。各国史、つまりナショナル・ヒストリーを超える視座からアイルランド史を見る必要をメンバー達に痛感させたのは、日本のアイルランド史研究者が長らくお世話になってきたダブリン大学トリニティ・カレッジのL・M・カレン教授による「比較史」的アプローチの提唱であった。このような理由もあって、本プロジェクトのそもそもの発端であった日本アイルランド協会主催の2002年度アイルランド研究年次大会シンポジウムの際には「なぜ、いまアイルランド史か——イギリス、ヨーロッパ・世界」というテーマであったものを、比較研プロジェクトとして続行する際に「比較史的アプローチによる近代アイルランド」に変更させて頂いた。また、プロジェクト開始にあたっては、カレン教授を招き、「比較史とは何か」を検討する研究会を開催した。（そこでのカレン教授の講演は比較経済研究所ワーキングペーパーNo.120に掲載されている。）

イギリス、アメリカ、ヨーロッパの影響を考慮することは、とりわけ、アイルランド史においては重要な意味をもつ。というのは、「イギリス」という国家はそもそも、たんなるイングランドの拡大版ではなく、それぞれが歴史的個性をもつイギリス諸島の諸地域、すなわち、イングランド、ウェールズ、スコットランド、アイルランド／北アイルランドによって——そして一時期は北米植民地さえも含んで——構成されてきた複合的国家だからである。したがって、イギリス史は、後三者がイングランドによる支配を受けたという一方的関係ではなく、それぞれの双方向的相互作用のプロセスとして捉えられる必要があり、そのためには、アイルランド史もまた、イギリス諸島史—イギリス帝国史—ヨーロッパ世界史という重層関係の中で展開されるものとして理解されなければならない。

以上のような「大志」を懐いて、プロジェクト・メンバーは過去2年間に10回の研究会を重ねてきた。その成果をまとめたものが本ワーキングペーパーだが、以下に続く報告要旨集は、プロジェクト報告書の性格を兼ねていることもあり、編年史的ではなく報告順の編集にさせて頂いた。したがって、時系列の流れを捉えにくいのではという懸念がもたれるが、各メンバーによる個々の史実の分析は、対イングランド、スコットランド、あるいは対アメリカ、ヨーロッパ関係とその影響をはっきりと抽出しており、「ナショナル・ヒストリーを超える」という本プロジェクトの狙いは多少なりとも達成できたかと思われる。

プロジェクト責任者
後藤 浩子
(法政大学経済学部)

第9回研究会

日時： 2004年11月13日（土）法政大学市ヶ谷キャンパスBT25階C会議室

報告者： 竹田 泉（東京大学大学院経済学研究科博士課程）

テーマ： 「初期綿業としての18世紀ランカシャー・リネン業」

コメンテーター： 斎藤英里（武蔵野大学）

【報告要旨】

初期綿業としての18世紀ランカシャー・リネン業

竹田 泉

本報告の課題は、18世紀ランカシャー・リネン業が東インド製キャラコの代替品を製造していたことに注目し、それを「初期綿業」とみることによって、これまでほとんど等閑視されてきたイギリス綿業形成期のキャラコの代替品製造業が、のちの本格的綿業にとってどのような意義をもっていたかについて検証することである。注目した点は、キャラコ代替品がどのような素材的な特質を備えたものであったか、販路がどこであったか、そして、経糸用の麻糸がいかにしてランカシャーに供給されたかという3点である。

では、東インド製キャラコはどのような織物であったか。17世紀後半に東インド会社がはじめてキャラコをイギリスに持ち帰った時、イギリスの人々は、その軽さ、薄さ、そして染めの鮮やかさに熱狂したといわれている。

イギリスへのキャラコ流入以後製造されるようになったランカシャー製のリネンは、経糸に麻糸、緯糸に綿糸を使用した混織物である点で、16世紀以来イギリスにおいて製造され続けていたファスチアンと同じであった。しかし、織物の性質や用途に着目すると、両者は違うものであったといえるのである。リネンは、薄くて軽く、鮮やかな色に染められることが多かった。また、洗濯が容易で、直接肌に着用が可能であり、東インド製のキャラコと同様の「世界商品」としての性質を持ち合わせていたのである。それに対して、ファスチアンは、厚くて重く、暗い色に染められることが多かった。それゆえ、直接肌に着用するというよりもむしろ、毛織物の代替品として男性用の外衣に用いられることが多かった。それゆえ、織物の性質から見ると、18世紀第4四半期にイギリスで国産化されるキャラコへの橋渡しをしたのは、ファスチアンではありえず、リネンだったといえるのである。

ランカシャー製のリネンは、本国の慎重な市場開拓、および政策的バックアップを背景に、大西洋地域へ大量に輸出された。イギリスの当該地域への輸出は、当初毛織物やファスチアンが中心であったが、18世紀はじめにはそれらはほとんど輸出されなくなった。大西洋地域のような暑い地域においては、上で述べたような性質を持ったファスチアンや毛織物は人気がなく、東インド製キャラコや、リネンのほうがよく売れたのである。ランカシャーにおいて、リネンは1730年代以降、本格的に製造され始め、世紀

後半期にはその輸出は急激に増加したのであるが、それに伴ってイギリス当局はランカシャー・リネン業の奨励に徐々に関心を持つようになり、1750年代には、外国製麻糸輸入関税の引き下げ、及び完全撤廃、1771年にはランカシャーで主に製造されるチェックと呼ばれるリネンの輸出に対する奨励金法を打ち出した。

18世紀は、アイルランドにおいてもリネン製造が盛んな時代であった。イギリスの大西洋地域への進出とともに、アイルランドにおいて当該地域でよく売れる中級以下のリネンの製造が盛んになり、そのイギリス経由での輸出は堅調に拡大した。アイルランド製リネンは、大西洋地域では、イギリスから輸出されるランカシャー製リネンや東インド製キャラコとの競争にさらされた。また、アイルランド・リネン業は、大西洋地域向けにリネンを製造する一方で、ランカシャー製のリネンの経糸に使用される麻糸製造にも携わっていた。ランカシャーで使用される麻糸の多くはアイルランドから輸入されるものであったのである。

18世紀初頭にアイルランド・リネン業に最大限の奨励を与える約束をしたイギリスであったが、18世紀後半には、アイルランドよりも自国のランカシャーのリネン業を奨励することに熱心になっていた。上述の1771年の輸出奨励金法がアイルランド製を奨励の対象外としたことに如実に現れたイギリス当局による偏った政策と、ランカシャー・リネン業の拡大に伴うアイルランドからの麻糸流出は、アイルランドにおいては約束の放棄として受け止められたのである。

以上のように、イギリス当局の政策的バックアップを受けつつ、アイルランド・リネン業を麻糸供給者として自らの成長過程に組み込みながら発展したランカシャー・リネン業は、18世紀末に綿業へと転化することになる。アークライトの紡績機の導入は、経糸綿糸を安定的に供給することを可能にしたために、アイルランド製麻糸のランカシャーへの輸入は激減した。

18世紀ランカシャー・リネン業は、市場が限定されない“Universal Use”な製品を製造し、それをもって広大な市場に進出したという点において、後の本格的綿業へとつながる「初期綿業」をあらわしていた。このランカシャー初期綿業は、大西洋地域への輸出、アメリカからの綿花輸入、アイルランドからの麻糸輸入を不可欠の要素として、つまり、製品需要の面でも、原料供給の面でも、外部に依存しながら、のちの本格的綿業への転化を準備したのである。